



理解と納得は違う

学校は企業同様、担当職員が起案し、最終的に校長が決裁をして、内容や進め方が決まり、業務が遂行されます。

元西都市教育長竹之下悟氏が約15年前、妻南小学校校長時代に部下の私たちに述べられた言葉が「理解と納得は違う」でした。当時の私は、(ん？つまり、校長先生は起案した内容に理解はしているけれど、納得はしていないってこと?)と捉えましたが、(何か気になるなあ、深い意味の込められた言葉ではないだろうか?)とずっと心に引っかかっていました。

管理職に就いて7年。ようやくその意味が分かり始めてきた感じがしています。「ものの方や考え方は立場によって異なる」と言います。判断が求められる管理職。先を見たり、全体を見たり、本質を見たりして思考することが求められます。

クリティカル・シンキング

今後、AIに奪われてしまう仕事が多いと言われている中、大人達は子どもの将来設計イメージを“高収入・高学歴”と言った古いものから“21世紀に成功する新しい子ども像”へとシフトしなければならぬときに来ているようです。従来の教育では、ひとつの正解をなるべく早く叩き出すことがゴールとされました。想定するキャリア



アも直線的で、よい成績を修め、よい大学に入り、よい就職をし、よい結婚をするのが理想と思われました。ところが、時代は変わり、こうしたキャリアが必ずしも幸せには結びつかないのではないかという、疑問が出てきました。国としては豊かになったけれど、自己肯定感が低く幸せを感じづらい子どもが多いという問題が露わになったのです。そこで打ち出されたのが「考える力の育成」を盛り込んだ現行の学習指導要領。キャリアの幅が広がり、外国の方と共に働く場も増えてきた現代において、自分がどう生きればハッピーになるのかを考える力を養ってほしい。そんな思いから、「自分の頭で納得がいくまで考えるスキル＝クリティカル・シンキング」や、思考をより深めるための議論のスキルが重要視されるようになってきたと言えます。GIGAスクール(一人一台端末)の推進、乳幼児のスマホいじりなど、今後、デジタルシティズンシップが浸透していくと「情報に惑わされない人間の育成」は喫緊の課題です。クリティカル・シンキングは和訳すると「批判的思考力」。批判的思考力とは「情報を分析し、論理的に解釈してその情報の価値を評価したり判断を下したりするために必要なスキル」と言われます。ひと言で言うと、「鵜呑みにしない思考力」。ものすごい量の情報がどんどん生み出される時代は「一歩引いて考える」「何が本当に必要なのかを見極める」「答える必要のある問題を選ぶ」など、情報を断捨離できる人が重宝されると言われています。

「言葉にしない」日本文化の影響

少し前に付度(そんたく：他人の気持ちを推し量ること)という言葉が流行しましたが、一般に日本人のコミュニケーションは受信者側が大きな責任を持ちます。発信者はすべての内容を言葉にしないため、受信者は推察などして「言葉にされなかった部分」を穴埋めしていくこととなります。一方、クリティカル・シンキングは議論に重きを置くため、言葉で意見を表明し、言葉でフィードバックを受けることとなります。ただでさ

え「言葉にすること」に慣れていないのに、質問されたり、反論されたりすると抵抗感を持つのは当然のことです。ただ、活発に議論する欧米人だって、反駁(はんぱく：他人の主張や批判に対して論じ返すこと)されて気分がいい訳はありません。けれども、言葉で議論する素地が培われているから、過剰に傷ついたり、神経質になったりすることはありません。要は慣れの問題ですから、小さなうちから基礎を養っておくことが大切なのです。「自分(親世代)には到底できないから、子ども達にも無理なはず。」と決めつけて、可能性を閉ざしてはいけません。将来は子ども達のためにあります。

議論を活性化させるために

先行事例を見ると、「言葉で議論する素地」を培うためには大切にすべきルールが4つあると言われます。

1つ目は、「何を言っても構わないけれど、人をバカにしたり、傷つけたりする発言だけはNG」。議論においては、とにかく気軽に発言してもらうことが大切です。そのためには「何を言ってもOK」と明言するのが重要なのですが、本当に「何でもあり」では無法地帯になります。子どもの心理的安全性を守るために、このルールは大前提です。

2つ目は、「途中で発言をやめてもいい」。特に学校では、手を挙げたら最後、正確な言葉で最後まで発言しなければならない……と、プレッシャーを感じる子どもがいます。こうしたプレッシャーは、自由な議論の妨げになるもの。手を挙げるハードルを極力下げるため、このようなルールが必要です。

3つ目は、「分からないことを聞くのはカッコいい」。大人でもそうですが、「知らない」と言うのを恐れる方がいます。でも、質問をするのは本来何も恥ずかしいことではありません。話し手はわかりやすい言葉を使い、聞き手は素直に質問する。議論を健全な、活気ある場にするために大切なことです。

4つ目は、「いつも笑顔でいる」こと。簡単そうに思えますが、これを心がけるだけで議論が前向きなものになります。子どもは、楽しくないことはやりません。「考えるのって楽しい」「議論って面白い」と感じてもらうためにも、笑顔で取り組むことが大切です。

それって、どうなの？

「理解と納得は違う」つまり、(分かるけど、納得できない)のよねえ……)という意識。

気難しい人、頭の固い人が思っているのでしょうか？チャレンジしようとする血気盛んな若者の気持ちをへし折る言葉なのでしょう。いやいや、逆に、この思考能力が未来を担う次世代に必要な力とされています。

コロナで、人との間隔やマスク着用等について議論が交わされました。熱中症で、暑さ指数と子どもたちの活動の兼ね合いについて議論が交わされています。さまざまな弊害が見られるスマホやタブレット、生成AI等の普及についてもずっと議論が続いています。でも……



私は、どれもすっかりしませんが、納得解が大切な時代と言いますが、納得解は個々の判断に委ねられる部分があり、多様に存在するため、もやもやとを感じるのかもしれない。「人は人、自分は自分」と割り切れる人はいいのかもしれないが、周囲を気にし、周囲に心を配る人には……。でも、こういうのが、同調圧力を生み出す遠因になっているのかもしれない。